

梅鶯仏教壮年会報

第122号
2014年
12月13日

竹灯籠の夕べ

十二月三十日(火)

夜5時半より竹灯籠点灯

夜6時よりお勤め(正信偈)

法話
引き続き

生きていたなら、この世では
いつかどこかで、また会いましょう。
死んだら、つぎは、お浄土でー
あなたが、わたしに会いましょう。
あなたと、わたしは、
同朋(とも)・同行(どうぎょう)。
「俱会(くえい)一処(いつしよ)」
お浄土でー
俱(とも)に出会える
法(のり)の友！

寺川幽響先生

先般、法輪寺の報恩講を梅鶯仏壮との合同
で無事勤め終えることが出来ました。
なお、釋勝俊氏の衆徒就任のご挨拶は、次
号に掲載させて頂きます。

組長様からの手紙

秋霜の候、ご院
内の皆さまには、
お健やかに二利ご
双行のこととお慶
び申し上げます。



さて、昨日十一
月二十二日は、法
輪寺さまの「報恩
講大速夜」のお取次ぎをお許し
いただき、誠に尊いご縁をいた
だき有り難うございました。

せつかく尊いご縁をいただき
ながら、浅学非才の拙僧にとり
ましては、しつかりとお取次ぎ
をさせていただけたとは言えま
せず、申し訳なく思っております。

お初夜法要にはご住職さまの
御伝鈔のご法話、誠に尊いご縁
をいただき、有り難く拝聴させ
ていただきました。

加えて梅鶯仏教壮年会主催の
懇親会には、手作りの温もりの
ある楽しい時間を過ごさせてい
ただき、よき思い出になりました。

またその際、厚かましく愚妻を
同伴させていただき誠に迷惑を
お掛け致しましたことをお詫び申
します。

しかしながら、お集まりの壮年
会の皆さまとの和氣藹々とした絆
は、長い歴史と法輪寺の皆さまの
いきとどいたご教化のお姿が感じ
られ、改めてお給仕の大切さを
ご教示いただきました。誠に尊いご
縁を有難うございました。

帰りにはいろいろのお土産まで
ご準備いただき、恐縮致しており
ます。

どうぞ、総代さまをはじめ皆さ
まによりしくお伝え下さい。
末筆になりましたが、ご住職を
はじめ皆さま方のご健勝と、法義
ご繁盛を願いながら、お礼の言葉
とさせていただきます。

南無阿弥陀仏

平成二十六年十一月二十三日

本願寺派布教使

藤浪正明

「それは、おじいちゃんになるためです！」と。

「それは、おじいちゃんになるためです！」と。一家は何故かほっとした雰囲気につつまれ、サザエさんが「タラちゃん。どうして？」と尋ねます。

そこでタラちゃんは、

「だって、裏のおじいちゃんは、なんでもよく知ってるし、小鳥さんやお花さんともお話しができるんですよ！」と答えます。

私たちは年を取り、老いることにはマイナスのイメージを持ち、悲しいことだと思っています。

けれどもタラちゃんから見れば、裏のおじいちゃんには素晴らしいと感じているのです。

○ありのままを

ありのままに

お釈迦様は「人生は苦なり」と仰り、その根源は、「生老病死」にあると示されました。

けれどお釈迦様は、「生老病死」そのものが苦であるとは言っていない。生老病死は自然な姿そのもので



谷大学元学長で仏教学者の信樂先生がご往生になり、私も広島のご自坊までお参りをさせて頂きました。信樂先生は、脳死問題などの現代的課題に関して、仏教学者の立場で厳しく発言され、どちらかというと大変厳格なイメージの先生なのですが、直接お付き合ひさせて頂いた者にとつては、非常に人間味のおふれた温かい先生でした。その信樂先生は、3年前に奥様を亡くされて以来、よく「あれがお浄土で待つてくれているから、早く行つてあげないと寂しがるのでなあ」と仰つていたそうです。そして亡くなる2日ほど前に、「ああ良いご縁だった」「有り難い人生を送らせて貰った」「お念仏に出会えてよかつた」というような言葉を仰られ、それが最後の言葉だったそうです。このような言葉で締めくくれる人生、これこそが、お念仏に支えられた人生なのだと味合わせさせて頂きました。

住職法話より